

アウトドアスポーツに関する授業プログラムにおける 学修成果と学修過程の検討

A Study of Learning Results and Learning Process in Educational Programs for Outdoor Sports

キーワード：野外スポーツ、野外教育、質的研究、定性的評価

Keywords: Outdoor Sports, Outdoor Education, Qualitative Research, Qualitative Evaluation

永井 将史

武藤 伸司

NAGAI Masashi

MUTO Shinji

Abstract

The purpose of this study is to verify the learning outcomes and learning process of educational program for outdoor sports. This program consisted of mountaineering and kayaking, and for about six months, there were on-campus classes, day trips, and training camps. Through quantitative evaluation and qualitative evaluation, we verified the skill acquisition of students and changes in their willingness to practice. As a result, it became clear that basic skills were fully mastered in both mountaineering and kayaking. A qualitative survey showed that changes in willingness to practice may be affected by differences in event characteristics and leisure factors not intended by the instructor.

1. はじめに

スポーツ庁が発表した「アウトドアスポーツ推進宣言」(2017)では、スポーツを楽しむ健康的なライフスタイルの定着や、アウトドアスポーツに適した環境である地方部への交流人口の拡大による地域振興、日本の恵まれた自然環境を活用した国際交流の推進等の観点から、アウトドアスポーツを推進することの重要性が述べられている。この宣言にあるようにアウトドアスポーツの推進は様々な付加価値を生む可能性があり、今後の我が国において多くの人々が一過性の参加にとどまらず、生涯にわたってアウトドアスポーツに関与していくことが期待される。

このような社会的背景のもと、人々がアウトドア

スポーツを生涯スポーツとして獲得するための重要な機会の一つとして、多くの大学で展開されている野外運動や野外教育に関連する教育活動が挙げられる。本学の野外運動研究室でも、他大学における動向を調査しつつ(東山ら, 2012)、野外運動・野外教育領域の科目を展開し、その成果の検証を行ってきた(永井ら, 2017、本田ら, 2018、永井ら, 2019)。その中で、平成24年に改訂されたカリキュラムでは、特にアウトドアスポーツに関する技術の習得と実践意欲の向上を目指した科目として「トレッキング」が開設された。この「トレッキング」では、野外活動プログラムの実施において、知識・技術の定着を十分に図れるよう継続的・反復的に活動を行うことや、事前・事後の学習を視野に入れたプログラムづくりによって内容の

充実を図ることが望ましいとされている(文部科学省, 1996) こと等を踏まえて、安全かつ快適に登山活動を実践する能力の育成を目的として、大学近郊の山域で4回の日帰り登山を継続的に実施するプログラムが構築された。この取り組みと成果をまとめた報告(東山, 2016) では、登山に対する知識・技術の向上と実践意欲の喚起に一定の成果が得られたことが明らかにされており、受講生の登山への継続的な関与を促す授業展開として一つの方向性を示した。しかしながら、この「トレッキング」は諸般の事情により平成27年度のカリキュラム改訂で科目廃止となったため、このような取り組みを継続、発展させる新たな方策が求められている。

本学で開講された「トレッキング」において、継続的に活動を展開することで必要な知識や技術の習得を目指したように、アウトドアスポーツへの関与を高めるための課題の一つに、特有の知識や技術の習得が挙げられる。自然環境の下での活動に適応するためには、フィールドに対する理解や適切な装備の活用が必要となる他、専門的な用具・器具を使いこなすことによって行われる活動(第二次的活動)^{注1)}では、自然環境から受ける外力と自身の動作を調和させ、効率的に運動成果を得ることが求められ、日常生活とはかけ離れた運動を習得しなければならない。さらに、多様な自然環境下で行われるアウトドアスポーツでは、活動場所までの移動を含む行程の立案、活動に必要な装備の手配、気象条件への対応など、活動を実践するための企画運営能力も必要とされる。従って、大学教育において受講生にアウトドアスポーツへの継続的な関与を促すためには、基礎的な知識や技術の習得に加えて、活動の実践に必要な企画運営能力も育成する必要がある。これらの知識・技術の習得や能力の向上は、活動を行うために不可欠であるが、習得や向上の過程そのものがアウトドアスポーツの楽しさや魅力を生起させる要因でもある。そのため、アウトドアスポーツへの関与の初期段階において、どのように基礎的な技術を習得していくかは、その後の活動の継続や専門化に強い影響を与えるものと考えられる。以上のことから、本研究では、継続的に活動が展開されるアウトドアスポー

ツに関する授業プログラムによって、必要な技術的・確に身に付けることが、受講生の実践意欲を高めることにつながり、アウトドアスポーツへの継続的な関与を促すという前提に立ち、大学教育における新たな授業プログラムの構築を行い、その成果を検証することとした。

ところで、野外における教育活動の効果を検証した研究は、実践科学や自然科学分野で盛んに行われてきたが、参加者に及ぼす影響因子が多岐にわたる野外では、定量化のために影響因子を削除せざるを得ない場合が多いことから、近年では量と質の混合型研究や質的研究の充実が期待されている(金子, 2018)。本研究の対象となるアウトドアスポーツの現場でも、定量的なデータを取ることは難しい。そもそも定量的なデータの取得は、観察や実験における再現性が担保されていなければ、取得する値のランダムネスが高すぎるため、サンプルの量を膨大にして統計を出したところで、離散的な値を示すに留まり、有意な解釈が難しくなる。しかしながら、野外において活動する指導者や学生が感じる臨場感や、偶発的な工夫、対処などの具体的な行動は、それこそがアウトドアスポーツの醍醐味である。また、これらの内実がまさに定性的なデータとなるため、対象者の体験の自由度を活かした調査や研究では、その影響因子の質的な特徴に注目することが有益だと言える。本研究の対象と目的がアウトドアスポーツに関する知識・技術の習得や実践意欲の喚起に関わることから、受講者の心理的に生じる意味や価値に言及する必要がある(有富ら, 2017)。これまでにも、継続的に活動が展開される大学の野外運動系科目における、受講生の学びを質的に捉えようとする試みもなされているが(堀出, 2006、渡邊, 2015)、いずれも報告的なものに留まっており、さらなる研究の蓄積が必要である。

そこで本研究では、アウトドアスポーツへの関与の初期段階にある大学生を対象とした、継続的に活動が展開されるアウトドアスポーツに関する授業プログラムの学修^{注2)}成果と学修過程について、量的なアプローチと質的なアプローチの両面から検証し、アウトドアスポーツに関する教育活動の在り方についての基礎資料を得ることを目的とする。

2. プログラムの概要

本研究では、東京女子体育大学で開講された、令和元年度前期「体育・スポーツ学ゼミナールIa 野外運動」において実施された、アウトドアスポーツに関する授業プログラムを対象とした。プログラムの概要を以下に記す。

2.1 目的と目標

プログラムは、アウトドアスポーツを実践するための技術の習得と企画運営に必要な能力の向上および、アウトドアスポーツの実践意欲の向上を目的として構築された。継続的、反復的な活動によって知識、技術を定着させることを意図して、大学近郊の自然環境で実践しやすい種目である登山とカヤックを採用

してプログラムを構築した。

このプログラムにおける具体的な到達目標は以下の通りであり、これらの目標を達成するために習得すべき知識や技術を明確にしてプログラムを構築した(表2、3参照)。

登山：標高2,000m以上の山域を含む縦走登山の計画と実践ができる。

カヤック：2級(クラス2)程度の瀬^{注3)}を含む流水域でのダウンリバーの計画と実践ができる。

2.2 日程と内容

プログラムは学内での授業(演習)、日帰り実技(登山・カヤック)、合宿(登山・カヤック)によって構成され、漸進的に学修が進むよう計画した。日程と内容を表1に示す。

表1 プログラムの日程と内容

【学内授業】		
回	日付	内容
1	4月10日	授業ガイダンス
2	4月17日	登山の基礎①：装備、食事、行動計画について
3	5月 8日	登山の基礎②：行動計画の作成
4	5月15日	登山の基礎③：ナビゲーション(読図とコンパスワーク)
5	5月22日	日帰り実技(登山)のふりかえり、合宿(登山)の与件の提示
6	5月29日	合宿の計画①：グループワーク(登山における山域・行程の検討)
7	6月 5日	合宿の計画②：グループによる計画のプレゼン、山域・行程の決定
8	6月12日	合宿の計画③：合宿(登山)の行動計画の検討、合宿(カヤック)の与件の提示
9	6月19日	合宿の計画④：装備計画の検討
10	6月26日	合宿の計画⑤：食料計画の検討
11	7月 3日	合宿の計画⑥：装備の確認
12	7月17日	合宿の計画⑦：炊事の実践
13	7月24日	合宿の計画⑧：合宿計画書の作成
【日帰り活動】		
種目	日付	場所・内容
登山	5月19日	川苔山(標高1,363m) 行程：川乗橋～百尋ノ滝～川苔山山頂～鳩ノ巣駅 総距離：13km 累積標高差：(登り)1,338m/(下り)1,452m 標準タイム：5時間45分 学習課題：装備の活用、ベース配分と休憩、ナビゲーション
カヤック	8月4日/10日	白丸湖(静水) 学習課題：フィールドの理解、カヤックの基礎知識、パドリングの基本、セルフレスキュー
【合宿】		
種目	日付	場所・内容
登山	9月10日	瑞牆山(標高2,230m) 行程：瑞牆山荘～瑞牆山山頂～瑞牆山荘 総距離：5.9km 累積標高差：965m 標準タイム：5時間 学習課題：装備の活用、ベース配分と休憩、ナビゲーション
カヤック	9月2日 ～ 9月4日	野尻湖(静水) 犀川(流水) 行程：道の駅大岡～大原橋 総距離：6.3km/道の駅大岡～鹿道 総距離：4.5km 学習課題：フェリーグライド、エディキャッチ・ビールアウト、セルフレスキュー

※ 合宿(登山)は台風15号の影響で2泊3日の縦走登山から日帰り登山に変更した。

2.2.1 学内授業

学内の授業では、初回ガイダンスの後、第2回から第4回にかけて登山に関する学習と行動計画の作成を行った。第2回の授業では、登山に必要な装備と使用方法、レイヤリング^{注4)}の考え方について学習した。また、登山中のエネルギー消費や登山中の栄養補給についても学習し、日帰り実技(登山)の際の昼食メニューについて検討した。第3回の授業では登山地図のコースタイムを基準とした行動時間の算出方法を学習し、日帰り登山の行動計画を作成した。第4回の授業では地形図による地形の把握、プレートコンパスの使用法について学習した。

日帰り登山を実施した後の第5回の授業では、登山のふりかえりを行った後、合宿の計画について与件を提示した。合宿(登山)の計画にあたっては「標高2,000m以上の山頂を含む2泊3日の縦走登山とする」、「1日の行動時間は、初日・3日目は5時間程度、2日目は8時間程度を目安とする」ことを与件とし、受講生を3グループに編成して、グループ毎にテーマ、山城および行程、宿泊と食事の形態、予算等の登山計画を検討するよう課題を与えた。第6回の授業をグループワークに充てた後、第7回の授業では、グループ毎に検討した登山計画の発表を行い、合宿(登山)における山城や行程の概要を決定した。

第8回以降は具体的な合宿の計画の作成を進めた。登山についてはリーダー、サブリーダー、食事、装備、庶務・会計の役割を決め作業を進めた。また、第8回の授業ではカヤックの合宿についても与件を提示して合宿計画の作成を始めた。合宿(カヤック)については、受講生に流水でのカヤックの経験が無いこと、情報収集が困難であること等からプログラムの場所や内容は予め定めて提示することとし、受講生は宿泊と食事に関する計画を進めた。第9回から第12回の授業では、合宿の計画を段階的に進めていき、第13回の授業では合宿の計画書を完成させた。

2.2.2 日帰り実技

登山は川苔山(東京都奥多摩町)で実施した。受講生を3グループに編成し、学習課題をチェックリス

トとして配布した上で、グループ毎の判断で登山を実施させた。

カヤックは白丸湖(東京都奥多摩町)で実施した。流水でカヤックを行う前段階として、静水でカヤックの基礎技術を学習した。受講生を2グループに編成し、それぞれ別の日程で実施した。

2.2.3 合宿

登山は上記したように2泊3日の縦走登山を、金峰山(長野県川上村)から瑞牆山(山梨県北杜市)の行程で計画していたが、台風15号の接近に伴う荒天によって中止を余儀なくされた。そのため、計画を変更して瑞牆山での日帰り登山を実施した。

カヤックは2泊3日の日程で野尻湖(長野県信濃町)および、犀川(長野県大町市・長野市)で実施した。初日の午後に静水での技術の復習を行い、2日目と3日目はダウンリバーを行い、流水におけるカヤックの技術を学習した。ダウンリバーの行程は、プログラムの目標に則して2級程度の瀬を含んで設定した。

2.3 指導者

プログラム全体を通して野外運動を専門とする教員1名が指導にあたった。その他に、日帰り実技(登山)では野外運動を専門としない大学教員2名、合宿(カヤック)では「日本セーフティカヌーイング協会(JSCA)」の公認資格を有するインストラクター2名が指導を行った。

3. 研究方法

本研究では、授業プログラムの学修成果と学修過程を多角的に検証するために、アンケートとレポートの記述をデータとして用いた。アンケートについては、定量的なデータとして傾向を示した。対象者の主観的な体験の記述であるレポートは、定性的なデータとして、質的な研究方法を用いて分析を行った。

3.1 対象者

令和元年度「体育・スポーツ学ゼミナールIa 野外運動」の受講者12名であった。

3.2 定量的調査

プログラムにおける学修成果を定量的に把握するために、技術の習得および実践意欲の変化について受講生を対象にアンケート調査を実施した。調査は登山およびカヤックの合宿の最終日に現地にて実施した。

技術の習得については、プログラムの内容に則して項目を設定した。登山については、「装備・服装」「ペース配分・休憩」「行程管理」「ナビゲーション」の4カテゴリー、14項目(表2参照)を設定した。カヤックに関しては「装備・服装」「基礎技術・漕艇技術」「安全技術」の3カテゴリー、12項目を設定した(表3参照)。合宿終了時の自分自身の技術について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5段階で回答を求め、それぞれ5点から1点と得点化して分析した。

実践意欲の変化については、プログラム受講前の実践意欲と合宿終了時の実践意欲について、「仲間に誘われても行かない」から「自分ひとりでも行きたい」の5段階で回答を求めた。登山は合宿が中止となったため、プログラムで実施した登山と同水準の標高や行動時間での日帰り登山を想定して回答するよう指示した。カヤックでは、静水でのカヤックと流水でのカヤックについて回答を求め、流水でのカヤックについては合宿で実施したダウンリバーと同水準の難易度や行動時間を想定して回答するよう指示した。また、それぞれ実践意欲の変化やプログラム終了時の実践意欲について自由記述での回答も求めた。

3.3 定性的調査

3.3.1 データの収集

プログラムにおける学修成果と学修過程を定性的に把握するために、すべてのプログラム終了後に受講生にレポートの提出を求めた。レポートにおいて求めた内容は、登山とカヤックの①「実践における知識・技術の習得」、②「実践のための企画・運営のプロセス」、③「総合的な反省や感想」である。質的分析方法の多くでは、現場における直接的な参与観察とインタビューがデータ収集の基本であるが、一定の長さを持った期間(およそ6か月)の中で、「ア

ウトドアスポーツに関する学修とそれに伴う意識の変化」という大きな枠組みでプログラムを構成したことから、参与観察は並行して行ったが、逐次的なインタビューは行わなかった。プログラムにおける体験を一貫して記述させるため、約2週間の期間を設けて課題という形で記述させることで実体験を整理し、受講者にとっての要点や強い印象を浮き彫りにさせる方策を採った。

3.3.2 分析方法

レポートから得られた定性的なデータに対して、本研究ではグレイザーとストラウスが開発した「グラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach 以下、GTAと略記)」(Glaser & Strauss, 1967)を援用して分析を進めた。GTAとは、量的研究方法に制約されずに、フィールドワークにおいて見出される特徴的な現象から発見を得るものであり、方法のプロセスとしては、以下の流れが一般的である。①参与観察とインタビュー(主に半構造化面接)によってデータを収集し、②データを試案的にカテゴライズし、③特徴的な言及や頻出する言及をピックアップしてコード化する。そして④コード化された概念をもとに理論化を行う(末武ほか, 2016)。これらの手順は、GTA自体が確定的なものではなく、研究に合わせて適宜修正を加えられることから、調査対象や研究目的に即して変化する。以上の基本を踏襲しつつ、本研究における分析は以下のプロセスで行った。

レポートをもとに、特徴的な言及、あるいは頻出する言及に焦点を当てて、概念の抽出と集計を行い、コード化した。コード化に際しては、本研究の目的、意図に沿った記述、語句を選択した。具体的には、①知識・技術について、専門用語(知識)や動きの習得におけるコツとカン(技術)を、②企画・運営について、準備段階における予測(企画)と実際に実行した際の成功や失敗(運営)を、③反省・感想について、改善点や以降のアウトドアスポーツに対するモチベーション(反省)や実行の中で起きた感情の変化(感想)を、ピックアップした。

3.4 倫理審査

本研究は、東京女子体育大学研究倫理審査委員会(研倫審・2019-23号)の承認を受けて実施した。

4. 結果および考察

4.1 定量的調査

4.1.1 登山の技術習得

登山の技術習得に関するアンケートの結果を表2に示す。

「装備・服装」の 카테고리では2項目とも4.0以上の平均値を示し、全ての受講生が「ややあてはまる」以上に回答した。本プログラムを通じて日帰り登山における装備や服装の準備や活用については十分に理解されたと考えられる。実技当日が初心者でも比較的対応しやすい気象条件であったことの影響も考えられるが、参与観察においても調理や降雨の際に適切な行動が見られた。

「ペース配分・休憩」の 카테고리では、全ての項目で4.0以上の平均値であった。学内の授業や実技を通じて、適切な歩行ペースや休憩のタイミング、

食事、水分摂取などについては十分に理解し実践できるようになったと考えられる。

「行程管理」の 카테고리では、2項目とも平均値が4.0を下回り、特に「⑨コースタイム以内で快適に歩く」ことについては、半数以上の受講生が「どちらとも言えない」以下に回答しており、上記した2つの 카테고리と比較すると相対的に低い値であった。上記2カテゴリの結果と合わせて考えると、登山における基礎的な技術や知識については十分に理解したものの、それらを実践しつつ、行程全体の時間を適切な範囲に収めることについては相対的に低い技術習得に留まったと考えられる。登山では特に下りの歩き方の理解と習得に時間がかかることが指摘されている(東山, 2016)。本研究における参与観察でも、登頂までは適切な時間で行動していても、下りでは歩行ペースや休憩のタイミング等が適切でない様子が散見され、下りの歩行技術が十分に向上しなかったことがこれらの結果の要因として考えられる。

「ナビゲーション」の 카테고리では、5項目全てで平均値が4.0を下回り、「⑭現地情報からの正しいルート判断」以外の項目では半数以上の受講生が「どちら

表2 登山における技術習得

	Mean	SD	とてもあてはまる		ややあてはまる		どちらともいえない		あまりあてはまらない		まったくあてはまらない	
装備・服装												
①登山に必要な装備を理解し、適切に活用することができる。	4.42	0.51	5	41.7%	7	58.3%	0	0.0%	0	0	0	0
②登山に適した服装を理解し、行動中に適切に調整することができる。	4.67	0.49	8	66.7%	4	33.3%	0	0.0%	0	0	0	0
ペース配分・休憩												
③適切な歩行ペースを理解し、地形の変化に合わせて調整することができる。	4.00	0.60	2	16.7%	8	66.7%	2	16.7%	0	0	0	0
④適切なタイミング、適切な時間で休憩を取ることができる。	4.17	0.72	4	33.3%	6	50.0%	2	16.7%	0	0	0	0
⑤休憩中にすべきことを理解し、実践できる(補給、衣類調整、ナビゲーション)。	4.42	0.67	6	50.0%	5	41.7%	1	8.3%	0	0	0	0
⑥登山に適した食事、行動食を理解し、適切に摂取することができる。	4.33	0.65	5	41.7%	6	50.0%	1	8.3%	0	0	0	0
⑦登山中に必要な水分量を理解し、適切に摂取することができる。	4.42	0.67	6	50.0%	5	41.7%	1	8.3%	0	0	0	0
行程管理												
⑧ガイドマップの情報からトータルの行動時間を算出することができる。	3.83	0.94	3	25.0%	5	41.7%	3	25.0%	1	8.3%	0	0
⑨ガイドマップのコースタイム以内で快適に歩くことができる	3.42	0.79	1	8.3%	4	33.3%	6	50.0%	1	8.3%	0	0
ナビゲーション												
⑩登山中に活用できる地図記号を理解している。	3.42	0.79	1	8.3%	4	33.3%	6	50.0%	1	8.3%	0	0
⑪地形図上で、ピーク・尾根・谷の判別ができる。	3.50	0.67	1	8.3%	4	33.3%	7	58.3%	0	0	0	0
⑫地形図を用いて行程の特徴(距離・方向・地形・目標物など)を把握できる。	3.42	0.79	1	8.3%	4	33.3%	6	50.0%	1	8.3%	0	0
⑬地図を整置(正置)して活用することができる。	3.33	0.78	1	8.3%	3	25.0%	7	58.3%	1	8.3%	0	0
⑭複数の現地情報から、正しいルートを判断することができる。	3.75	0.75	1	8.3%	8	66.7%	2	16.7%	1	8.3%	0	0

とも言えない」以下に回答した。本プログラムでは地形図の読み方、プレートコンパスの使用法について学習したが、相対的に低い技術習得に留まった。一般的に、これらの技術を十分に習得するためには、多くの学習と経験の蓄積が必要とされる。近年では、安全管理や正確な行動記録の観点からGPSを活用することの有効性も指摘されており(永井, 2014)、最近ではスマートフォン等の端末で使用できるGPSアプリも多数開発されている。大学の授業等においてもこれらを有効に活用する方法を検討する必要があると言えよう。

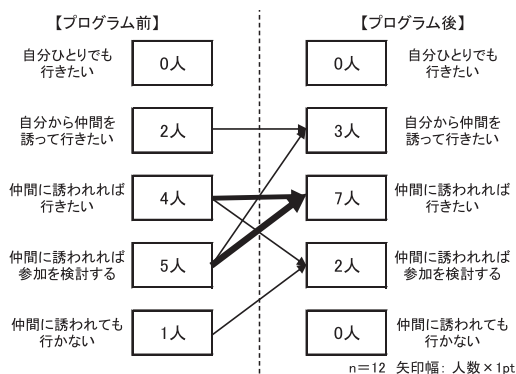


図1 登山に対する実践意欲の変化

4. 1. 2 登山に対する実践意欲の変化

プログラム前後における実践意欲の変化を図1に示した。

プログラム前には「仲間に誘われれば参加を検討する」の回答が最も多かったが、プログラム後には「仲間に誘われれば行きたい」の回答が最も多かった。さらにプログラム前には「仲間に誘われても行かない」への回答もあったが、プログラム後には全ての受講生が「仲間に誘われれば参加を検討する」以上に回答した。本プログラムを通じて、受講生は日帰りの登山に対して自分ひとりでいきたいとまでは思わないまでも、仲間と一緒にであれば積極的に参加を検討する程度には登山に対する実践意欲を高めたこ

とがうかがえる。

自由記述では「仲間と登ることで登山の楽しさを感じることができた」「友達と一緒にであれば参加したい」「友だちと一緒にであれば登りたい」等の記述が見られ、仲間や友だちと登山を行う楽しさを体験したことが実践意欲の向上につながっている様子が見えられた。

4. 1. 3 カヤックの技術習得

本プログラムにおけるカヤックの技術習得に関するアンケートの結果を表3に示す。

「装備・服装」のカテゴリーでは2項目とも4.0以上の平均値を示し、全ての受講生が「ややあてはまる」

表3 カヤックにおける技術習得

	Mean	SD	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
装備・服装							
①カヤックに必要な装備を理解し、適切に活用することができる。	4.58	0.51	7 58.3%	5 41.7%	0	0	0
②カヤックに適した服装を理解し、行動中に適切に調整することができる。	4.50	0.52	6 50.0%	6 50.0%	0	0	0
基礎技術・漕艇技術							
③環境に応じて安全にカヤックへの乗り降りができる。	4.58	0.67	8 66.7%	3 25.0%	1 8.3%	0	0
④フォワードストロークを用いてカヤックを直進させることができる。	4.33	0.65	5 41.7%	6 50.0%	1 8.3%	0	0
⑤スウィープ・リバーススウィープストロークを用いてカヤックを回転させることができる。	4.08	0.67	3 25.0%	7 58.3%	2 16.7%	0	0
⑥ドロウ・スカーリングでカヤックをサイドスリップさせることができる。	3.58	0.79	1 8.3%	6 50.0%	4 33.3%	1 8.3%	0
⑦流水(犀川程度)でフェリーグライドができる。	3.83	0.72	2 16.7%	6 50.0%	4 33.3%	0	0
⑧流水(犀川程度)でエディキャッチ・ピールアウト(ストリームイン)ができる。	3.92	0.67	2 16.7%	7 58.3%	3 25.0%	0	0
安全技術							
⑨沈をした時に適切にセルフレスキューの態勢を取ることができる。	4.17	0.72	4 33.3%	6 50.0%	2 16.7%	0	0
⑩川の特徴とそこに潜むリスクを把握することができる。	4.08	0.90	4 33.3%	6 50.0%	1 8.3%	1 8.3%	0
⑪川下りのために適切にスカウティングとルートジャッジメントができる。	3.50	0.52	0 0.0%	6 50.0%	6 50.0%	0	0

n=12

以上に回答した。実技当日が初心者でも対応しやすい気象条件であったことの影響も考えられるが、プログラムを通じて、カヤックにおける装備や服装の準備や活用については十分に理解されたと考えられる。

「基礎技術・漕艇技術」の категорияでは、「③カヤックの乗り降り」「④フォワードストローク」「⑤スウィープストローク」の3項目で4.0以上の平均値を示したが、「⑥ドロー・スカーリング」「⑦フェリーグライド注5)」「⑧エディキャッチ・ピールアウト注6)」の3項目では4.0以下と相対的に低い値を示した。静水、流水を問わずに必要な前進、回転のためのパドリングは十分に習得することができたが、やや応用的な技術であるサイドスリップについては相対的に低い技術習得に留まったと言える。また、流水でのダウンリバーで求められるフェリーグライドやエディキャッチ・ピールアウト等の技術については、相対的には低い値であったが、6割以上の受講生が「ややあてはまる」以上に回答していることから、本プログラムで目的とした技術的な到達目標は概ね達成したと言える。

「安全技術」の категорияでは、「⑨セルフレスキューの態勢」「⑩リスクの把握」については4.0以上の平均値を示したが、「⑪スカウティングとルートジャッジメント」については相対的に低い値であった。適切なスカウティングとルートジャッジメントができるようになるには多くの経験が必要であるが、本プログラムにおいては、セルフレスキューの態勢をとることや、流水におけるリスクを把握することについては十分に学習されたと考えられる。

4.1.4 カヤックに対する実践意欲の変化

プログラム前後における実践意欲の変化について、静水でのカヤックを図2に、流水でのカヤックを図3に示した。

静水、流水のどちらにおいても、プログラム前には「仲間に誘われれば参加を検討する」以下の回答が最も多かったが、プログラム後にはほとんどの受講生が「仲間に誘われれば行きたい」以上に回答した。プログラムを通じて、受講生は自分ひとりでも行きたいとまでは思わないまでも、仲間と一緒にあれば積極的に参加を検討する程度にはカヤックに対する

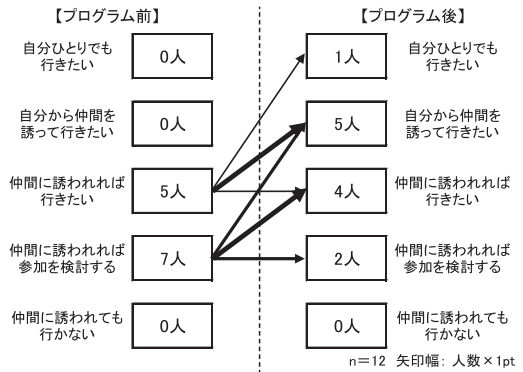


図2 静水でのカヤックに対する実践意欲の変化

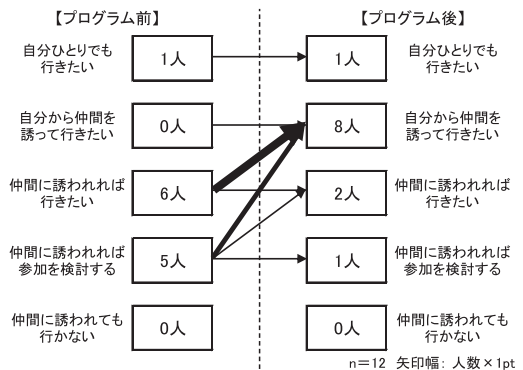


図3 流水でのカヤックに対する実践意欲の変化

実践意欲を高めたことがうかがえる。また、今回の調査ではプログラム後において、静水でのカヤックよりも流水でのカヤックに対する実践意欲の方が高い結果を示した。

自由記述では「流水でやることでもっと技術を向上させたいと思った。活動前より意欲はかなり高まった」「技術を身につけることによって、楽しさだったり、意欲が高まってきた」「流水の方のカヤックは色々な流れがあって楽しかった」等の記述が見られた。受講生は、技術を向上させて流水に対応していくことに楽しさや魅力を感じており、そのことが実践意欲の向上につながっている様子がうかがえた。

4.2 定性的調査

レポートをもとに、特徴的な言及、あるいは頻出する言及に焦点を当てて、概念の抽出と集計を行い、コード化した結果を表4-1、表4-2に示す。

表4-1 レポートからの概念の抽出とコード化の結果(登山)

	①知識・技能	②企画・運営	③反省・感想
1	計画 ビッチ 計算 トータル 行動時間 逆算 トラブル 余裕 地図 コンパス 現在地 行程	会計	日帰り 今まで登ったことのない山 楽しい ワクワク 四季で変わっていく景色も見たい 縦走できなくて残念 また計画を立てたい
2	経験を活かし 暑がりの自分をより理解 気温を想定 調整 雨具の着用 温度差 体温調節	アイデア 計画 自然を感じる 登山計画書 班のみんなで協力	日帰り 体験、経験を活かして 早く山頂につかない かな 早く帰りたいな 楽しかったなという感情に変わる トンボ 疑問 普通の人ではあまり経験することが ないもの たくさん挑戦 とにかく楽しい夏
3	キャンプ 登山経験 野外教育論 装備 ベース わ からないことや知らないことだらけ いろんな経験がで きる! 期待 不安 ビッチ計算 エネルギー消費量 栄養摂取 ナビゲーション 地図記号 学び 登山 ルート 歩行時間の計算 知識 ベースの確認 衣 類の調節 行動食の必要性 ワンパーナークッキング 食事を楽しんだ	計画 食事を担当 材料の値段 計画書 まとめ 大変 買い出し 中止 ショック	雨 川 岩 無事下山 青空 きつかっただろう 筋肉痛 体がバキバキ
4	ピーク 尾根 地図 頂上	計画をみんなでプレゼン 登山前日 思った以上にア ワアワ 具体的に細かく 話し合い	
5	縦走予定 台風 日帰り 実習やキャンプの知識 コースは今ままで一番きつい 一番達成感のあるコー ス 岩やがけを上がる技術が身につけていなかった 苦労 今回身についた	プレゼン 多数決 良かった 装備の確認 事前準備 協力	想像していなかった 岩 緊張感 ハラハラドキ 楽しかった 縦走 心残り リベンジ 活動中心 目標に向かって 成し遂げよう 雰囲気 チームワーク 一層仲が深まった
6	縦走登山 日帰り 雨 様々な環境 衣類や装備の 変更 経験 どの道を選ぶか 考えながら歩く ベー ス配分 体に負担がかからないように歩く 大切さ 学び	企画運営 必要な装備 計画 標高 宿泊場所 詳 細 行動計画 受け身 流していた しっかり確認で きた 台風 天候 決行 キャンセル 判断 対応 思ったよりも自分の考えた装備では足りない みんなの 考えが一致しない 難しい	大きな岩山 仲間 励ましあい その先に見えた景色 綺麗 登った甲斐 会話数が減ると辛くなる みんな ながいたから楽しい 自然の中でしかできない 魅力 そこでしか見られない景色 他のスポーツでは得られな い 野外運動の楽しさ たくさん経験して学習したい
7	ルートの見方 休憩のビッチ 学ぶ 疲れたときに疲 れた分だけ休む 時間が決まっている 大変 下ると とき 休憩を短くする 休憩を飛ばしてしまった 後で自 分が苦しくなる 危険		
8	山についての意識は必ず押さえる 天候に左右される 行動服 調べずに決行したらがをする 可能性 残 念 事前に調べることの重要性 ベース配分 休憩の 取りすぎ 登り続けて経験を積む 体力が少なくグルー プのペースをつかむのが難しい 登る順番を変える 一定のペースで歩くことができた 何度も挑戦して調整	台風の影響で計画が実行できない 残念	ゲームをしながら登る あつという間に頂上 辛そうと いうイメージがあったが、仲間のおかげで楽しいという イメージが変わった 人生で最も充実した夏
9	1時間1ビッチ 同じペースで歩く しっかり食べ、たっ ぷり飲む 地形を把握	登る山を決めて準備が大変 ルート決め 宿泊所 食 事の計画 予算 やることが多い テントの部品確認 分担 大変	得意ではなく不安だった これまで話したことなかった ゼミのみんなと話すようになった 昼食を考えたり、実 際に作ることが良い思い出になった 縦走登山 岩が 多くて上るのが大変 日帰りでよかった 自分たちだけ でも挑戦したい
10	正確なナビゲーション ルートのマーク 現在地の把握 地図との参照 目印や地形の特徴 コースタイム の記録 コンパスの使い方	プレゼン アピールポイント あまりなかった 他のグ ループのプレゼンに興味 参考にする プレゼンのとき に疑問を質問する しおりの作成が大変 小屋の受け 入れ時間に間に合わない 不明な点が多い 役割をき ちんとこなす	台風で中止になってしまったことが残念 日帰りでも全 員で活動できたことが嬉しかった テントが予定通りに 設置できるか気になった 全員無事でよかった
11		行きたい山をプレゼンするのが楽しかった 山の魅力を 伝える 調べるのが楽しかった たくさん話してコミュ ニケーションが取れた もっとみんなで企画したい 他の野外運動もしたい	台風で日帰りになり、残念 岩山はきつかった 山頂か らの景色がきれい 縦走したかった リベンジしたい 企画するのが大変だけど、考えているうちにワクワクす る 日帰り登山もカヤックも楽しすぎた ハードなスケ ジュール 人生で一番楽しい夏休み 一番充実した またみんなで行きたい
12		サブリーダー 特にこれと言ってやるのがなかった 仕事を探していた 比高断面図の作成 やり方がわか らなかった 一から作った	台風が縦走がなくなってしまった残念 日帰りでも楽し かった 岩だらけの山を登る感覚は初めて 同じような 道を登るよりこうした岩道のほうが楽しい また全員で 一緒に計画して縦走したい

表4-2 レポートからの概念の抽出とコード化の結果(カヤック)

	①知識・技能	②企画・運営	③反省・感想
1	フォワードストローク スウィーブストローク スカールリング レスキュー 沈脱 グラブループ スターン WWFP 仰向け 立たない 足を下流に向けて エディ 反転流 岩の裏 休憩所 エディキャッチ ヒールアウト ストリームイン タイミング フェリーグライド	会計 大変 仕事量 宿 連絡	思い通りに動かない 疲れる 落ちたらどうなる? 内心嫌でたまらなかった 清水 思い通りに動く 少し楽しめる 底が見えない 恐怖心 流水では全く違うものだろう 不安 犀川 予想通り 違う動き 同じ乗り物なのに全く違う 成長できた 嬉しい 楽しい 波に乗れず悔しかった 再挑戦したい 会計 大変 とても疲れた
2	基本的な漕ぎ方 まっすぐ進む 同じ力で漕ぐ コントロール 重心 逆側 全身 波の高さ 流れる速度 場所によって違う バドルの扱い方 沈 実践で学ぶ工夫して漕ぐ	ある程度の知識、技能はある 戸惑うことはなかった 専門的な方が指導 応用 新たに学んだ知識、技能 基礎の確認 応用の実践 段取りが良い 充実した	良い思い出 メガSUP チャレンジ 大自然
3	フォワードストローク スウィーブストローク 沈脱 レスキューされるまでの流れ グラブループを引っ張る お尻から出る カヤックを起こす バドルを入れる スターンを持つ WWFP 実践 リバーツーリング 横向きに漕ぐ スカールングドロップ エディキャッチ ストリームイン フェリーグライド 挑戦	リーダー 頼りない 係 まとめてくれた 助けてくれた 感謝	一切やったことがない 楽しみでわくわく まったく安定せず焦る 行きたい方向に進めず慌てる 慣れて楽しい 気分が上がる すいすい漕ぐ 体を倒しすぎて沈脱 とても焦った 焦っている時間は2, 3秒 沈しても落ち着くことが大切 組体操のピラミッド 飛び込み 相撲 すべてが楽しかった みんなのおかげ 最高に楽しい夏
4	沈脱の対応 絶対にバドルを離さない 足を下流に向け仰向け ひねりながら水をかく 流れが速い 焦る バドルをバウに近づけるのを忘れる 焦らずに行うのが大事 スカールングドロップ 少し遅めにバドルを入れる 手前に引き寄せる エディラインに入っても漕ぎ続ける ストリームイン ある程度のとこまで進んでフェリーグライド 油断	いつかは自分たちだけで行きたい まだまだ難しい ガイドをつける どの川で行うのか	ガイドがいて本当に良かった 基礎知識 技術面 遊びも全力 楽しかった 一度も沈脱しなかった 成長できた 長い距離 漕ぐと足に力が入る 筋肉痛 波 スリル満点 盛り上がった 飛び込む写真 漕いでいる動画
5	一度も経験がない 想像と全く違う ひたすら岩にぶつかる ただ前に動かすんじゃない 艇の横を直線に近い軌道で漕ぐことが大切 後ろに下がる バドルの裏側 水をキャッチ 向きを変えるスウィーブ 救助法 技や知識を活かし 川の違い 天候の関係 流れが速いところ 波が高いところ 大変 様々なテクニック 波を回避 岸と岸を渡る シチュエーションを楽しむ	去年を参考 代表の人たち中心	全体のチームワーク 仲の良さが深まった 新しい友達 交流関係の広がり 責任感 水が得意でない 最初は怖かった インストラクター 声かけ 嬉しかった
6	次の動きにつなげる 焦らずにゆっくり大きく漕ぐ 大きく最後までしっかり漕ぐ 水の圧力を感じる 体全体で漕ぐと楽 沈脱 カヤックを起こす バドルを艇に入れる WWFP 足を下流に向けて 仰向けの状態 焦ってしまう 分かっているけど行動に移せない 流れやすい 流れに逆らう 本流に対して30度 流れに乗って向こう岸まで漕ぎきる 30度より大きいと水の抵抗を受ける 転覆		進むことで精いっぱい 1日経つごとに仕組みを理解 漕いだときの感覚 そのときそのときの流れ 対応 学び たくさん技術や知識 身についた 最初は腕が痛い 酔ってもう漕ぎたくない マイナスな考え 技術を身につける カヤックでしか楽しめない景色 スリル 味わい 恋しくなる
7	どこかで右か左に偏る 回転しそうになったら早く漕いでしまった ゆっくりやるのが大切 声に出す 体が言葉と同じ動きをする 沈脱 エディをするといつも目標より後方に落ちる いつもより手前からのエディ 工夫 一度ひっくり返った 焦ることなくできた フェリーグライド 横に漕ぐと水の重さで倒れそうになる 怖い 横に漕いだ時勢よく水を切ってしまう 原因に気づく	会計・庶務担当 お金を数えるだけではなかった お店の予約、支払いのすべてを行う 予約確定の電話 名簿や活動の時間割をファックスで送る 施設の説明を受ける 伝達 案内 ご飯やお風呂の時間の把握 指示だし	技術、知識をたくさん学んだ それ以上に仲が深まったことが印象深い 良かった 忙しくて大変だったがとても楽しかった
8	まっすぐ漕いでも斜めに行ってしまう 何度も挑戦した バドルと同じ方向に体を傾ける 足に力を入れる 体を傾けることは沈脱の恐怖でなかなかできなかった エディラインの見分け方が難しい 沈脱のレスキューが最も重要な学び 流されてしまうリスク 静水より流水で練習 漕ぐたびに上達した もっと技術を積みみたい 新しいことを学んで挑戦したい 技術によって楽しみ方の幅が広がる	計画 細かいところまで調べる 何度もやり直して修正 計画通り進んだ レクリエーション係 時間がなくて仕事できなかった 決められた仕事以外でも協力 みんなを楽しませることができた	計画段階から楽しみだった 楽しい記憶ばかりで、学んだ記憶が薄くなっている 湖より川のほうが楽しい 波のあるほうに挑戦 仲間とより仲を深められた
9	フォワードストローク スウィーブストローク 腕だけで漕ぐのではなく上半身全体を使う 姿勢や足の位置 自分に合った位置 漕ぎやすく疲れにくくなる なるべく速く水を掴まえる ブレードを見ながら腰をひねって漕ぐ 沈脱 グラブループは絶対に外に出す カヤック起こし バドル入れ スターンを持つ 足を下流に向けて仰向け	道具レンタル 講師 ツアーに参加するほうが簡単	カヌー実習 他の人にぶつかる きれいな川で楽しかった 水が冷たくて気持ちよかった メガサップ 何度もひっくり返りそうになったが一度も落ちなかった 落ちるのが怖くて慎重になった

	①知識・技能	②企画・運営	③反省・感想
10	パドリング フォワードストローク スィープストローク スカーリングドロウ ビールアウト 沈脱 グラグフープ スターン WWFP 足を下流に向ける	カヤック	川で活動することがなかった 新しい経験ができてよかった カヤックはスキーやスノーボードの体の使い方と一緒に 別の川でもやりたい
11	フォワードストローク 漕ぐことに精一杯 水に入れる角度 スィープ 難しい 他の人にぶつかる パドルの先端をしっかりと水の中に入れる 自分の後ろまで漕ぐまっすぐ進むのが難しい フェリーグライド 川の流れるに乗るところでもう難しい 斜めに行くのが難しい スィープが弱いと流れに乗れない スカーリング 垂直にパドルを引く	宿舍きめなどの手続きが大変 たくさん食べて美味しく簡単に作れるご飯 材料の計算が大変 みんながおいしいと言ってくれてよかった	インストラクターの人が良く教えてくれて嬉しかった
12	まっすぐ進むことが難しい スィープの使い方を理解回転せずに進む方法がわかる 段々と安定してきた 沈脱 パニックになってしまわないように 静水と流水で感覚が全然違う 湖ではエディラインが何なのかわからなかったが、川でははっきり分かった 不安定さの実感 油断しないようにした フェリーグライドは何度やってもうまくいかなかった スィープを粘り強く行った		初めての挑戦 想像していたより楽しい また絶対やりたい 波が高く流れが速いところの方が面白い 倒れないように頑張ってバランスをとるのが楽しい カヤックについては知識と技術が身についた

4.2.1 登山の知識・技術

レポートにおいて、どの受講生にも多く言及されていたのは、「登山計画やその山の知識といった、登山対象の山に対する先行的な理解がもっと必要であった」という点である。技術としては、4.1.1で示した通り、受講生は「装備・服装」「ペース配分・休憩」の理解や実践について上手く行っていたようであるが、「行程管理」「ナビゲーション」の技術習得の達成度が低かったことからこの点がうかがえる。

後者の2点については、上述の通り学習と経験の蓄積が必要であるが、それとともに、登山道の情報やそれに基づくシミュレーションが不足していたと考えられる。地形図とプレートコンパスから現在地とルート確認をすることは、抽象度が高く、具体的に現場に落とし込むことは容易ではない。このことは往々にして「登ってみたいことには」と経験に任せてしまいが、一般的な登山道であれば、写真や口コミ等の情報収集によって補填することができる。これらの情報をつないでいくことによって、登る山に対するイメージを膨らませることは、難易度の高い山であればあるほど重要であると言えるが、このことがあまりなされないまま受講生は実行に移っている。受講生のレポートでは、瑞牆山で岩肌を登ること、それがどのような感じであるのかは、あまり想定できていなかったことが読み取れる。例えば、体験した感想として、「岩が多くて上るのが大変」(表4-1, 9-③)「岩山はきつつか

た」(表4-1, 11-③)という言葉及は、体験した結果はもとより驚きの意味も含んでいる。現場では、そうした想定外から来る驚きや不安、恐怖が見受けられた(ただし、少数だが楽しそうという肯定的な意見もあった)。行程管理やナビゲーションは数字や記号だけの問題ではないため、このように「具体的な情報で補完する」ということも併せて指導する必要があると考えられる。

例えば、今回は登山の山域と行程を決定する際のプロセスで、受講生を3グループに編成してプレゼンテーションを行っている。どのグループも概ね山頂からの景色や名所、登山時間、ルートなど、特徴的なトピックの紹介は盛り込まれていたが、さらに詳細な情報として、難所やポイントとなる地点などは言及されなかった。こうしたプレゼンテーションに対して、「疑問を質問」(表4-1, 10-②登山)すればよかったと記述した受講生もいる。受講生のレポートから、「体温調節」「ピッチ計算」「栄養補給」などの「一般的な」登山の知識が習得できている様子は確認できており、今後はさらに山域と行程の具体的な「個別な」知識(情報)を準備するよう、指導内容を検討する必要がある。

4.2.2 登山の企画・運営

登山の企画・運営に関しては、ほとんどの受講生が「大変」であったと記述している。企画については、

登山計画を作成して発表すること自体は、楽しんでできたというコメントがほとんどであり、上述の問題点を除いて、それぞれに登山に対する期待値を高めることができた様子うかがえた。ただし、運営に関しては各人に役割があり、会計、食事、装備、宿泊所の手配など、仕事によって負担の度合いは変わるが、いずれも強い負荷を感じていたと述べている(表4-1, 4, 6, 9, 10-②)。

この言及は、そもそも受講生にこうした合宿の準備や実行の経験がないためであろう。合宿自体の経験や参加は、今回の受講生は中高生の際の部活動等で比較的経験は豊富であると考えられるが、自らが自らのために準備するという経験はほとんどの者が初めてであった。ただし、今回は大きなトラブルもなく計画を遂行し、合宿を運営できたため、それが自信になった様子うかがえた。「もっとみんなで企画したい」(表4-1, 11-②)という前向きな意欲が提示されており、継続につながる兆しが見えている。

4.2.3 登山の反省・感想

どの受講者にも共通して、「台風による日帰り登山の変更」が心残りであると述べられていた。「次は縦走をしたい」という希望もほとんどの受講生が記述しており、登山に対する興味関心が非常に高い状態であると判断できる。数回の登山経験を経て、知識・技術が高まったことが、登山に対する興味や自信のベースとして寄与していると考えられる。岩肌を上り下りするスリルや、山頂での景色、登頂の達成感など、登山特有の魅力を体感したことがそのような記述の背後にはある。また、縦走できなかったことに対する「リベンジ」(表4-1, 5-③)や「自分たちだけでも挑戦したい」(表4-1, 9-③)という言葉が見られ、登山という行為自体の魅力に引きつけられていると読み取ることが可能である。

ただし、それらのことは、アンケート調査の結果の通り、「仲間と一緒にであれば」という条件付きの言及である。「早く山頂につかないかな」(表4-1, 2-③)「ゲームをしながら登る」(表4-1, 8-③)などの言及は、一人で長時間にわたる単調な歩行を実行するほどのモチベーションがないことを示しているよう

にも見える。ただ、安全管理の観点からは複数人での山行が望ましくもあるため、継続的な関与を促すためには、プログラム終了後の環境づくりや活動支援も検討する必要があると言える。

4.2.4 カヤックの知識・技術

どの受講生においても、カヤックの基本的な知識は身につけているようであった。艇の各部名称はもちろん、パドルの漕ぎ方の名称は特殊なものであるが、レポートでは正確に記述されていた。実践において、どのような状況でどのような漕ぎ方をするのかという記述、例えば基本のフォワードストロークに始まり、応用的なエディへの入り方やフェリーグライドの方法に全員が言及しており、その難しさやコツについての言及が多数見られた。例えば、艇の進入角度や、パドルの入水の仕方、漕ぐ位置、角度、重心のコントロールなど、単に「難しい」や「できなかった」ということではなく、練習の最中に何を意識し、どんな工夫を行ったのか、という詳細な記述がみられた。「艇の横を直線に近い軌道で漕ぐことが大切」(表4-2, 5-①)「体全体で漕ぐと楽」(表4-2, 6-①)「ブレードを見ながら腰をひねって漕ぐ」(表4-2, 9-①)など、積極的にコツを探る姿勢が見られる。参与観察においても、カヤックに興味を持ち、技術を高めて楽しもうとする様子が観察されたが、レポートの記述からも裏付けることができる。

一方、今回のプログラムでは静水でのパドリングから流水でのパドリングという段階を踏むが、後者の技術的な難易度は非常に高い。当然ながら、流れの速さや波の高さによって、静水でできたことができなくなることは往々にしてあり、受講生もその変化に「焦り」を感じて「大変だった」という感想が多数あった。ただし、これらの状況に対する具体的な対応も示されていた。例えば、流れの中でパドリングに混乱をきたしそうな時、「声に出す 体が言葉と同じ動きをする」(表4-2, 7-①)「大きく最後までしっかり漕ぐ」(表4-2, 6-①)など、事前の学習成果を落ち着いて応用していた。また、静水より流水の方が上達したという記述(表4-2, 8, 12-①)もあり、より実践的な学習の方が、技術の向上に寄与した可能性もある。

沈脱^{注7)}する者も少なく、受講生の基本的な身体能力の高さも学習成果を高めることに影響していると言えるだろう。

さらに、沈脱に関する言及も全員から見られ、専門用語の使用、レスキューの手順について、正確かつ詳細に記述できており、この点については特に学習成果が高かったことがうかがえる。カヤックはリスクを伴う活動であり、経験のない受講生は、実践する前から「不安」「怖い」というイメージを持ちながら活動していた。そのことが、レポートの記述からも参与観察からも見て取れた。このような心理状態において、受講生たちは沈脱やレスキューの説明に、特に真剣に耳を傾けていたし、手順を繰り返し確認していた。つまり、こうした不安や恐怖を伴うネガティブな心理状態であったことが受講の際に高い集中を促したと考えられる。カヤックに限らずアウトドアスポーツにリスクはつきものであるが、この点については今回のプログラムと並置した登山のリスクの説明よりも集中度の度合いが相対的に高かったと感じられた。「未経験であること」、そして「溺れる可能性」というリスクの具体性が、その差を生んだのではないかと推察されるが、この点については、その他のアウトドアスポーツとの比較を通じて検証すべきことであり、今後の課題とする。

4.2.5 カヤックの企画・運営

カヤックの企画・運営に関しては、プログラムの内容やインストラクターの手配、装備のレンタルなどは指導者が行い、受講生が担当したのは宿泊と食事の手配のみであった。カヤックに関しても、4.2.2同様、経験のなさからか、総じて大変であった、苦勞を感じたという記述がほとんどであった(表4-2)。ただし、この点に関するレポートの記述は極端に少なく、また、参与観察においても特筆すべき事態も見られなかった。

4.2.6 カヤックの反省・感想

カヤックについては、最初から楽しみにしていた受講生もいれば、不安でたまらなかった受講生もいたようである。しかし、全員がプログラム後には、カヤ

ックの技術向上を真剣に目指し、それに伴う楽しさも感じていたようである。インストラクターの指導が適切だったこともあるが、同時に技術の習得の早さと真剣さが、「楽しい」(表4-2, 1, 3, 4, 7, 12-③)「また絶対やりたい」(表4-2, 12-③)というモチベーションを高めたと言える。

また、「川(流水)」という特殊な状況下でのアウトドアスポーツは、受講生にとって目新しいもので、不安はあったが好奇心を引くものでもあったようである。特殊な環境下で特殊な活動をするということが、特別感を抱かせ「最高に楽しい夏」(表4-2, 3-③)という印象につながったと考えられる。この特別感とは、例えばカヤック自体はもちろんだが、それだけでなく、プログラムの合間の川への飛び込みや、写真撮影などである。つまり、これらのレジャー的な要素に対して、受講生が良い思い出として好印象を抱いていると指摘できる。こうした強い印象を伴った思い出は、継続的な活動を促すための十分な要件であろう。レクリエーション活動に関わるレジャー的な要素は、幸福感や満足度に寄与し、活動の継続に相関があることが示されている(松本ら,2018)。こうした印象づけをプログラム中にどれだけ意図的に行えるかは課題となるが、技術の向上のみならず印象的な思い出の獲得も活動の継続につながる重要な要素であることが示された。

5. まとめ

本研究では、アウトドアスポーツに関する授業プログラムを対象として、その学修成果と学修過程を量的なアプローチと質的なアプローチの両面から検証した。

知識や技術の習得については、登山、カヤックともに良好な結果であり、この点でのプログラムの到達目標は概ね達成できたといえる。ただし、登山における行程管理やナビゲーションやカヤックの安全技術のように、相対的に習得度が低い技術もあった。これらは習得に多くの経験の蓄積を必要とするものではあるが、より効率的に習得させるための工夫はプログラム改善の一つの方向性と言える。

企画運営能力の向上については、登山、カヤックともに合宿の企画や運営について「大変」であったとの記述が多く見られ、経験の少ない受講生にとっては、アウトドアスポーツを実践するための企画運営は大きな負担を感じるものであることが示された。ただし、登山の企画については、実践に対する期待値を高めることにつながっていることもうかがえたため、受講生の経験を踏まえて、適切な負荷となるように課題や与件を調整することが重要であると言える。

実践意欲については、登山、カヤックともにプログラム後に、自分ひとりでも行きたいとまでは思わないまでも、仲間と一緒にあれば積極的に参加を検討する程度には高まっていた。ただし、この結果はともに活動できる仲間の不在が、アウトドアスポーツへの継続的な関与の阻害要因となる可能性を含むものとも考えられるため、継続的な関与を促すためには、プログラム終了後の環境づくりや活動支援の必要性が示唆されたと言える。また、実践意欲の変化には種目特性の違いが影響した可能性も示された。登山では、仲間と登山を行う楽しさや、登山特有の魅力を体験したことが実践意欲の変化につながっていたが、カヤックでは、特に流水に対応するための技術を向上させることの楽しさが、実践意欲の向上に影響を与えていたと考えられる。さらに、指導者が意図していないレジャー的な要素が受講生の満足度を高め、継続的な活動を促す重要な要素になる可能性も示された。堀出(2006)は、大学体育授業における登山特有の学びは、明確にその効果を意図して構成されている部分(主に課題として提示される)と、そうでない部分の両方があること生起するものであると指摘している。今後は、これらのことを考慮したプログラム展開や指導の在り方についても検討していく必要があるだろう。

注

1) アウトドアスポーツは「用具形態」「自然領域」から、主に身体的資質の活用の下に行われる活動(第一次的活動)、専門的な用具・器具を使いこなすことにより行われる活動(第二次的活動)、動力を伴う用具・器具を使いこなすことに

よって行われる活動(第三次的活動)に区分される(吉田章(1994). アウトドア・レジャー(1). 製品と安全. 製品安全協会. 55: 20-26)。

- 2) 本研究では、アウトドアスポーツを教育という理念的な枠組みとして捉えることも目的としていることから、授業全体の学びを表わす場合には、大学での教育という観点から「学修」とし、個別の技術や知識、用具の操作方法の習得を示す場合には、「学習」とする。
- 3) 流れの早い瀬には難易度に応じて1～6級(クラス1～6)の等級がつけられている。2級の瀬とは、「1m程度の波はあるが、障害物がなく、流れの幅もあり、素直に流れる早瀬である。障害物がないため、初心者でも快適に下れると判断できる早瀬で偵察の必要性はほとんどない」とされている(日本レクリエーションカヌー協会(2013). カヌースポーツ基礎 環境教育としてのカヌー. 海文堂. p. 133)。
- 4) レイヤードシステムとも言い、ウェアの重ね着によって、防水、防風、保温、吸湿などの機能を引き出す組み合わせのことである(野村仁(2007). 登山入門. 山と溪谷社. p. 151)。
- 5) カヤックで流れを利用して、滑走するように対岸に渡る技術のことであり、流水でのカヌーには欠かせない技術である(日本レクリエーションカヌー協会(2013). カヌースポーツ基礎 環境教育としてのカヌー. 海文堂. p. 136)。
- 6) 瀬の出口や障害物の裏側等に形成される渦流を「エディ」と呼び、カヤックでは休憩やスカウティング(偵察)で利用する。本流からエディに入ることを「エディキャッチ(ストリームアウト)」と呼び、エディから本流に出ていくことを「ピールアウト(ストリームイン)」と呼び、流水でのカヌーの基本的な技術である(日本レクリエーションカヌー協会(2013). カヌースポーツ基礎 環境教育としてのカヌー. 海文堂. pp. 135-137)。
- 7) 転覆した際に艇から脱出することであり、安全管理のための基本的な技術である(日本レクリエーションカヌー協会(2013). カヌースポーツ基礎 環境教育としてのカヌー. 海文堂.

Pp. 90-91)。

引用・参考文献

スポーツ庁 (2017). アウトドアスポーツ推進宣言. スポーツ庁Webサイト.

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1399436.htm,

2019.11.30参照

文部科学省 (1996). 青少年の野外教育の充実について. 文部科学省Webサイト.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm, 2019.11.30参照

東山昌央, 大石示朗 (2012). 特色ある野外教育プログラム開発のための基礎研究—他大学との比較に見る本学の野外教育プログラムの展望—. 東京女子体育大学女子体育研究所所報, 6: 11-20

永井将史, 東山昌央, 大石示朗, 本田宗洋 (2017). 本学スキー実習の取り組みと学習成果に関する報告. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 52: 119-126

本田宗洋, 永井将史, 大石示朗, (2018). 本学保健体育学科の水泳授業と海浜実習の取り組みに関する報告. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 53: 175-182

永井将史, 田島真沙美 (2019). 野外活動実習が女子体育大生の大学適応感に及ぼす影響. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 54: 45-56

東山昌央 (2016). 近郊の自然環境でおこなう継続型登山授業の実践報告—平成27年度トレッキング実習—. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 51: 105-117

金子和正 (2018). これまでの研究法を振り返る. 野外教育研究法. 杏林書院. 201-202

有富公教・外山美樹 (2017). スポーツの課題遂行に見られる思考パターンの検討—パフォーマンスおよび感情の変化との関連—. 筑波大学心理学研究, 53: 1-12

堀出知里・橘直隆 (2006). 「野外運動(登山)」を通して学生は何を学んだか—ある卒業生へのインタ

ビューからの考察—. 大学体育研究, 28: 83-90
渡邊仁 (2015). 継続型登山授業における登山初心者の基礎装備に対する意識変化. 野外教育研究, 8(2): 67-79

Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research. Chicago: Aldine Publishing Company. (グレイザー, B. G.・ストラウス, A. L. (1996). データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか(後藤隆・大出春江・水野節夫訳), 新曜社.)

末武康弘, 諸富祥彦, 得丸智子(さと子), 村里忠之 (2016). 「主観性を科学化する」質的研究法入門—TAEを中心に. 金子書房.

永井将史 (2014). 山行計画とプランニング. 冒険教育入門シリーズ第5巻冒険教育の理論と実践. 杏林書院. 131-141

松本英雄・千足耕一 (2018). 海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与えた影響: スクーバダイバーを対象とした質的分析. 野外教育研究, 22: 19-36

付記

本研究において、代表研究者の永井将史は、研究の総括、調査の実施、本論の執筆を担当した。共同研究者の武藤伸司は、質的データの分析、本論の執筆を担当した。また、本研究は平成30年度東京女子体育大学奨励個人研究費(永井)と、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(武藤:課題番号19K20080)の支援を受けてなされた研究の成果の一部である。